

県営ほ場整備事業(昭和49年度)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告

板木北垣外・板木

KASIWAGI KITAGAITO · KASIWAGI

1975

長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

柏木北垣外・柏木遺跡緊急発掘調査報告

長野県上伊那郡飯島町教育委員会
南信土地改良事務所

柏木北垣外遺跡

序

飯島町は、昭和48年8月より全町におよぶ県は整備事業を行なっている。この柏木北垣外、柏木両遺跡の緊急発掘調査もそれに関連して南信土地改良事務所より委託されて実施したものである。

七久保は、西は越百山・丈念岳・鳥帽子岳に続く山地帯が7km、その山麓にひろがる扇状地と小規模な段丘とが、中川村境まで3km余り連なっている。この与田切、南の前沢川の間形成された古い扇状地は、再びこれらの河川とその支流によって浸食が進められている。

この全地域に約51遺跡が存在している。中央道用地内に7遺跡、中央道西、山麓地帯に12遺跡、東方扇状地帯に12遺跡となっている。この柏木北垣外・柏木両遺跡は、与田切川によって形成された古い扇状地の広がるところに存在する遺跡の一部と考えられる。

今回の発掘調査によって、柏木北垣外遺跡からは縄文時代の遺構、溝状遺構・土坑・江戸時代の配石などが検出され、出土品としては、縄文時代の土器・中世・近世の陶器等貴重なものが発見された。

柏木遺跡からは、縄文時代の遺物・柱穴址・マウンド等が発見され、今後研究すべき資料として貴重なものである。何れにしても、県は事業始まって最初の発掘調査であるので、今後行なわれる全域調査によって、これらの遺跡の立派な位置づけが出来るものと期待している。

この調査を行なうにあたり、調査団が結成され、長野県教育委員会桐原指導主事の御指導を仰ぎ、調査団長に友野良一先生、調査員に伊藤修・丸山弥生・和田武夫の諸氏を御依頼した。

最後に、この成果に対し、南信土地改良事務所をはじめ、県教育委員会・調査団の諸先生、地元町民の皆様には深甚なる謝意を表する次第であります。

昭和50年3月3日

飯島町教育委員長

北原健三

凡 例

1. この調査は、県宮は場整備事業に伴う緊急発掘で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町教育委員会が実施した。
2. 本調査は49年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
3. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

友野良一、箕浦税夫、伊藤 修、丸山弥生、草野智子、赤羽義洋、福島史雄、
北沢雄喜、吉沢文夫、（順不同）

図版作成者

- 遺構及び地形

友野良一、伊藤 修

- 土器拓影及び実測図

伊藤 修

- 写真撮影

友野良一、伊藤 修

4. 本報告書の編集は主として、飯島町教育委員会があつた。

目 次

序	
凡 例	(1)
目 次	(2)
挿図目次	(3)
図版目次	(3)
第 I 章 環 境	(4)
第 1 節 位 置	(4)
第 2 節 地形・地質	(5)
第 3 節 歴史的環境	(9)
第 II 章 発掘調査の経過	00
第 1 節 発掘調査に至るまで	03
第 2 節 発掘日誌	01
第 III 章 遺構・遺物	07
第 1 節 遺 構	07
第 2 節 遺 物	08
第 IV 章 所 見	33

挿 図 目 次

第 1 図	位 置 図	14
第 2 図	地 層 図	16
第 3 図	七久保地区遺跡分布図	19
第 4 図	遺構配置図	19
第 5 図	第 1 号址	27
第 6 図	第 2 号址	28
第 7 図	第 3 号址	28
第 8 図	土城及び柱穴群	29
第 9 図	土 城	29
第 10 図	第 1 号・第 2 号溝状遺構	29
第 11 図	配 石 址	29
第 12 図	焼 石 炉	29
第 13 図	焼石炉底部	28
第 14 図	土器拓影・陶器実測図	28
第 15 図	石器・金属製品実測図	31

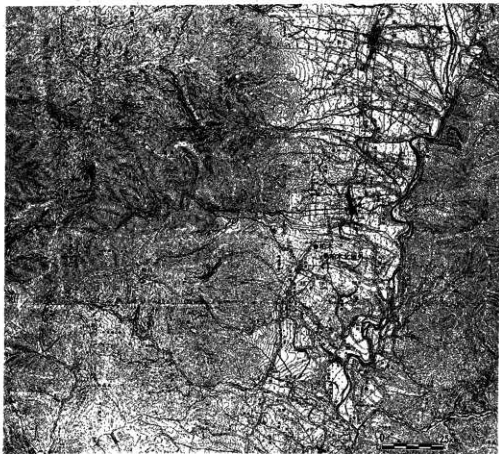
図 版 目 次

図版 1	遺跡遠望・遺跡全景
図版 2	第 1 号址・第 2 号址
図版 3	第 3 号址・土城及び柱穴群
図版 4	第 1 号溝状遺構・第 2 号溝状遺構
図版 5	配石址・配石址内の溝・土城
図版 6	焼 石 炉
図版 7	遺物出土状況
図版 8・9・10	出土陶磁器
図版 11	地層断面・記念撮影

第 I 章 環 境

第 1 節 位 置

柏木北垣外遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字七久保 2395 番地に所在する。当遺跡は、七久保地区の北東端に位置しており、東側は本郷第 1 部落に続いている。遺跡の南側は、子生沢川へ続く窪地となっており、比高約 7 m の台地となっている。遺跡は、国鉄飯田線七久保駅で下車し、鉄道にそって北へ約 1 km ほど歩いた所である。 (伊藤 修)



第 1 図 位 置 図

第2節 地形・地質

中央アルプスと南アルプスに挟まれた伊那谷は、南北に細長い盆地である。この基底には、天竜川が流れ、さらに天竜川に向かって、中央アルプス・南アルプスより源を発する大小の河川が流れ込んでいる。天竜川とこれらの河川は、伊那谷の各地で河岸段丘と扇状地を形成している。

天竜川の支流である、与田切川と前沢川に挟まれた七久保地区は、中央アルプス山麓の扇状地上にある。この扇状地上を、さらに中小の河川が走り、それにより到る処に細長い台地が形成されている。

柏木北垣外遺跡は、このようにして作られた東西に細長い台地上にある。台地の幅は、約90mほどである。北側・南側は東西に走る窪地となっており、台地との比高は、北で5m、南で7mとなっている。南側の窪地は、そのまま子生沢川の深い谷へと続いている。東側は、扇状地としてのゆるやかな勾配をもっており、本郷の河岸段丘へと続いている。(伊藤 修)

柏木北垣外遺跡の地質構造は、北斜面を削り取る事によって明らかになった。露出した地層の厚さは5m強であり、その殆んどが御嶽から噴出した降下火山砕屑物、信州ロームであった。

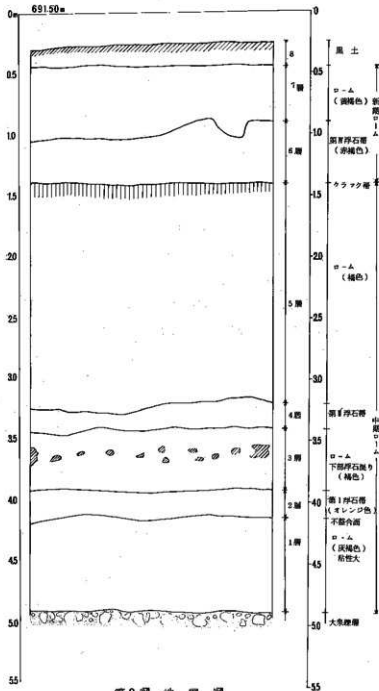
その最下部は、第2図に示す様に大泉礫層であり、その上に厚さ約3.5mの中期ローム、厚さ約1mの新时期ローム、さらに厚さ20~30mの黒土が存在した。

次に各層について記す。

1) 大泉礫層

この段丘の基部であり、礫の大きさは中位の物で直径30m程度、大きな物では90mを超えるが、上部には比較的小きな礫が存在する。この礫の間隙を、基質である砂が満たしている。礫、砂とも、その岩質の多くは背後の中央アルプスから供給された花崗岩質の物であり、河川によって運搬された扇状地堆積物である。この事は、大泉礫層の下に不整合をなして存在する高雄礫層と、この大泉礫層の礫の組成、堆積状態が似ていることから言える。また礫の風化度は、風化の進行し易い花崗岩質岩であるがやはり高雄礫層の方がその度合いが高い。この大泉礫層の厚さは、伊那谷の北部に於ては10~15m、中部約20m、南部50m以上と南へ向う程、その厚さを増している。他の礫層に比し層の厚さは薄い方であるが、その最上部の高度はむしろ高い。そして扇頂部近くでは、普通、他の新しい礫層に被われている。なお

柏木北加外遺跡のローム



第2図 地層図

この大泉礫層が堆積したのは、ウルム水期Ⅱ以前、リヌーウルム間水期の始めからウルム水期中頃までの間と考えられている。

2) 中期ローム

(A) 1層

1層は、灰褐色の粘性の強い硬質ロームで下部の大泉礫層と整合をなし、上部の2層と不整合をなす。2層との不整合は顕著であり、不整合面には炭化した植物の遺骸が認められた。粒度はほぼ一定で、風成層と思われる。X線分析の結果、このローム層中の粘土の鉱物は、加水ハロイサイトであり、この層は中期ロームであると判別した。層の厚さは、約80cm。

(B) 2層

1層と不整合をなす浮石帯で、中期ローム中の第1浮石帯である。色は鮮明なオレンジ色で、粒の大きさは親指の頭大、同じくらいの花崗岩質岩の礫を含む。なお、この浮石帯の色は北部にいくにつれて白味がかかる。鉱物としては、磁鉄鉱と普通角閃石を多く含み、他に紫蘇輝石、普通輝石、ジルコンを少量つつ含む。粘土鉱物は一定の結晶構造を持たぬアロフェンと 14Å 鉱物である。間隙が多く、厚さは約25cmであるが、この第1浮石帯は駒ヶ根周辺でその厚さが最大となり、2mを超える。そして北部へいくに従い減少する。

(C) 3層

2層とも4層とも整合的に接しており下部塵粒子が粗く、2層の浮石が混る褐色のロームである。1層とは異なり堆積岩などの砂粒が多く入り、また粘性も1層程強くはない。しかし粘土鉱物は同じく加水ハロイサイトである。またこの層の中程には、酸化鉄によって赤褐色に変色した部分がある。この層の下部は分級されており、また小さな部層も存在することから、2層と3層は水成であると思われる。この層の厚さは約50cm。

(D) 4層

3層、5層と整合的に接している赤褐色の第1浮石帯である。この浮石帯は圧縮されており、粒を見わけるとはできず、間隙も少ない。また、上下層との境界もあまり明瞭ではない。鉱物としては磁鉄鉱が多く、次に紫蘇輝石、他に少量の普通角閃石も含む。粘土鉱物は、アロフェンと 14Å 鉱物である。層の厚さは約20cm。

(E) 5層

ほぼ均質的な褐色の硬質ロームであり、上部の新时期ロームとの境界にクラック帯が存在する。粘土鉱物は、加水ハロイサイト、厚さ約180cm。

※この北垣外遺跡に於いては中期ロームの第1浮石帯、第2浮石帯、第3浮石帯が欠陥し

ているが、これらはいずれも伊那谷南部では見られないものであり、中部・北部に分布している。

3) 新期ローム

(A) 6層

やや硬質の黄褐色ローム中に直径2~5mm程度の赤褐色浮石が散在する層であり、第Ⅳ浮石帯である。鉱物としては紫蘇輝石が比較的多く、磁鉄鉱・普通輝石がこれに次ぐ。粘土鉱物はアロフェンである。

(B) 7層

軟質黄褐色のローム層で上部ほどやや腐食質となり、色も黒味が強くなる。粘土鉱物はアロフェンである。

※第Ⅴ浮石帯は欠除している。やはり伊那谷南部には分布していない。

4) 黒土

腐食土であり、耕作土として使用される。

以上によりこの遺跡が存在する段丘は、大泉礫層の上に中期ロームと新期ロームが堆積して成立した大泉段丘である

ことがわかる。伊那市西方の六道原段丘などで代表される様に、大泉段丘は、天竜川にそって発達している他の、より新しい段丘面上に幾分高い、モノドノック様の地形をなしているのが特徴である。さらにこの段



地層調査風景

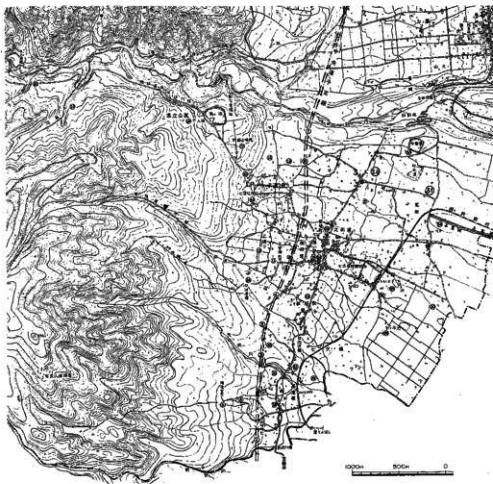
丘面のE~W方面の勾配は、新しい段丘面に比してむしろ緩やかである。これは、この段丘の基盤である大泉礫層が形成される時、礫を運搬する河川の勾配が、ほぼ水平の状態にあった事を示していると思われる。

なおこの遺跡の南と北は一段低い御子柴段丘2、東はやはり一段低いヨコヤマ段丘、西側の一段高い段丘は高雄段丘である。

(福島史雄)

第3節 歴史的環境

七久保地区の遺跡については、次の通りである。



第3図 七久保地区遺跡分布図

- 1 鉾物部原 2 嶋尾天伯 3 嶋尾 4 尾越 5 道満 6 北原東 7 小段 8 三林
9 殿平 10 中河原 11 石原 12 月夜平 13 北原西 14 北村天伯 15 赤坂 16 寺井
17 千人塚 18 上邸 19 よきとき橋 20 矢の沢 21 よせ山 22 中ヶ原 23 新屋敷 24 南街道
25 北街道 26 柏木 27 カゴ田 28 針ヶ平 29 山の神 30 新田 31 柏木北垣外 32 小横沢
33 本郷堤 34 荒田 35 高遠原 36 嶋尾東

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

当町では、昭和47年6月町議会の議決を経て、飯島町基本構想を制定、これに基づき昭和48年11月飯島町基本計画が策定された。この基本計画により、昭和48年度から県営ほ場整備事業が事業実施可能地域全域を対象として実施されている。この事業により町内のはとんどの埋蔵文化財が破壊されてしまう危険にある。そこで昭和47年11月12・19日に飯島・田切地区、昭和48年11月1日に七久保、本郷地区の包蔵地分布調査を友野良一氏に依頼し、町文化財調査委員会で行ない、南信土地改良事務所に調査結果を報告した。県教育委員会からは、現状保存を望むがやむをえない場合には緊急発掘調査を行なって記録保存するよう指導があった。今回の発掘調査は、県営ほ場整備事業地区内の最初のものとして、南信土地改良事務所長から委託を受けて行なった。

七久保地区第1工区にある柏木北垣外遺跡緊急発掘調査に至るまでの経過を簡略に記してみよう。

昭和49年7月22日 南信土地改良事務所長から発掘調査協議の依頼がある。

昭和49年8月5日 長野県教育委員会桐原指導主事、南信土地改良事務所丸山技師、役場農林課塩沢主事、飯島町教育委員会事務局箕浦主事、伊藤主事で現地協議を行ない、予算額を算出する。

昭和49年9月9日 調査団を委嘱する。

昭和49年8月12日 県教育委員会から発掘調査計画書及び予算書が町教育委員会に届く。現場にグリットを設定する。

昭和49年8月17日 調査団結団式を行ない現場での作業に入る。

昭和49年8月23日 南信土地改良事務所長から契約締結の通知がある。

昭和49年9月17日 南信土地改良事務所長と1,359,000円で契約締結。

〔発掘調査団〕

団長 友野良一（日本考古学協会会員）

調査員 伊藤 修（飯島町教育委員会）

調査員	丸山弥生	(国学院大学生)	
特別調査員	吉村 達	(駒ヶ根市博物館)	
調査補助員	和田武夫	(長野県考古学会会員)	
〃	北原健三	(飯島町文化財調査委員)	
〃	宮下静男	〃	
〃	片桐 修	〃	
〃	山口 繁	〃	
〃	桃沢匡行	〃	
〃	草野智子	(国学院大学生)	
〃	赤羽義洋	〃	
〃	福島史雄	(秋田大学生)	
調査事務局	織田正己	(飯島町教育長)	
〃	箕浦税夫	(飯島町教育委員会事務局)	
〃	片桐文子	(〃)	(箕浦税夫)

第2節 調査日誌

8月17日(曇)午前8時半、発掘現場で結団式を行ない発掘を開始する。最初にグリットを設定する。道路より入った水田の畦を基点C地区A50(以後CA50とする)とし、それより西へB地区A地区、東へD地区E地区とする。グリットは2m角とし、西から東へ向ってA、B、C……Yとなり、基点より南へ49、48、47……、北へ51、52、53……となる。この方法は、長野県の中央道用地内の発掘調査と同じ方法である。B地区とC地区の数箇所を調査する。C地区の2箇所に着ち込みを認める。遺物は、陶器片2点、付近の拡張は明日とする。

8月18日(晴)昨日の落ち込みの拡張を行なう。B地区、C地区の台地南面の調査をほぼ終える。北面に調査地区を移す。BX62より配石が確認される。配石からは骨が検出される。馬捨て場ではないかという説もでる。遺跡東側の1号トレンチからは、溝が確認された。

8月19日(晴)最初に確認された落ち込みを第1号址(後に第3号址と変更)とする。B地区の配石を掃除して実測を行なう。1号トレンチの溝の調査を進める。

8月20日(晴)丸山調査員を中心にして、1号トレンチの溝の調査を進める。溝は西側で浅くなり、なくなってしまう。溝の中の数箇所よりピットが見つかる。同じくらしい間隔のような気がするが、さらに調査の進行をまたなければならぬ。第1号溝状遺構とする。数名でA地区とB地区の数箇所調査する。遺跡北西の桑畑より集石が確認される。焼石炉とする。午後3時すぎブルドーザーが来る。道より入った最初の水田と桑畑の耕作土を削いでもらう。本日より町文化財委員の山口氏参加する。植物・石造物の方を調査してくれるとの事。

8月21日(晴)本日より辰野の赤羽・福島君が参加する。昨日に続きブルドーザーによりA地区、D地区の耕作地を削いでもらう。B地区の桑畑BK41地場下、埋土層より土器片が10片ほど出土する。埋土内の出土のため、出土地点に遺構があるのか、それとも他から移動してきたものなのか確認できない。発掘を開始して以来、1箇所より集中して土器片が出土したことがないため、注意して調査を進める。最初に確認された配石の南側より別の配石が検出され、最初の配石を1号配石、他を2号配石とする。配石は自然石が雑然と置かれており、さらに北側に拡張しプランの全貌をだすようにする。調査のすんだ部分の実測を行なう。8月22日(晴)昨日に続きBK41グリットを中心に調査を行なう。やはり地場下の埋土層より土器片が出土する。無文であるために時期が不明である。縄文後期あるいは土師器と思われる。1号・2号配石の実測を行なう。2号配石は、やや雑然とする1号配石に比べ規則的な感じがする。また配石のレベルは、1号配石は2号配石に比べ10cm前後高くなっている。

明日も、プランの全貌を確認するため拡張する予定。第1号溝状遺構は、ほぼ調査を終える。溝は道路の東まで続いていると思われる。溝は台地の北端を台地と平行に掘られているため、溝の内側を南北のトレンチによ

り調査する。焼石炉は付近を拡張したが遺物は出土しなかった。

8月23日(晴)2日前より土器片が、出土しているBK41付近を第1号址とする。一部張床と思われる面が確認された。1号2号配石は、南西に拡張して調査を行なう。その結果ピット2個と配石ともなう落ち込みを確認した。第1号溝状遺構の南



発掘風景

側の拡張部からは、柱穴と土
 塚を確認した。土塚内より骨
 粉らしいものを検出しており
 土塚墓ではないかとも考えら
 れる。焼石炉は、清掃を行な
 い写真を写す。焼石の一部は、
 地場を作る際削り取られたら
 しく、北東へ石が散乱してい
 る。焼石炉の北の斜面をブル
 トーザーで削り、地質調査を
 始める。今後の調査の進め方
 について、打ち合わせを行な
 う。

8月24日(晴) 第1号址は、
 東あるいは南に傾斜が強かっ
 たと思われる。最初張床と考
 えていた所は、はっきりしな
 くなった。焼石が2個あり遺
 構の中心付近になるといわれ
 る。柱穴は褐色土中に黒色土
 の落ち込みとなっており、ロ
 ーム層の上部まで達している。
 配石の調査は、昨日確認され
 た2号配石にともなうと思わ
 れる落ち込みの全面プランを
 確認するため拡張を行なう。
 陶器片が数点出土する。第1
 号溝状遺構の南側は、本日も
 拡張を行なう。その結果新た
 に土塚と柱穴が確認された。



配石地層断面



土塚群調査風景



休憩の一時

発掘風景

焼石炉を調査していた班は、A044グリットへ移る。石鏝、土器小破片が出土したため付近の拡張を行なう。土器片はA0～APラインにかけ出土しており、明日に期待して作業を終る。地質調査は、写真を写せる状態になる。山口氏、遺跡付近の石造物の調査を行なう。

8月25日(雨時々曇) 久しく雨が降らなかったが、台風15号の影響で作業開始ころよりぼつぼつと降り始める。午前中はなんとか調査が行なわれたが午後には作業を中止とする。遺構の分担、今後の進め方について話し合う。配石は昨日に引き続き落ち込みの全面プランを確認するため東側に拡張する。第1号溝状遺構の南は全面拡張と決め遺構の確認を急ぐ。昨日石鏝の出土したA044グリット付近は、本日も土器片が出土しピットも数ヶ所確認されたため、遺構であると考えられる。出土遺物が少ないことや炉址が確認されないことなどから住居址とは決め難く、第2号址とする。

8月26日(雨) 雨のため作業を中止とする。

8月27日(雨) 雨のため作業を中止とする。午後、調査員、補助員で土器の注記、各遺構の標高を調べ明日の調査に備える。

8月28日(晴) 第1号址より縄文後期と思われる土器片が出土したため、これまで土師器とも考えていたが縄文後期と改める。拡張を続けていた1号・2号配石から骨片、陶器片が出土する。第1号溝状遺構は、清掃を行ない写真を写す。地質調査は、写真撮影、地層の実測を行なう。

8月29日(晴) 第1号・2号・3号址の清掃を行ない写真を写す。配石から見つかった落ち込みは、北へ拡張した結果住居址特有の床面の状態をしておらず、遺物もなく単なる凹凸であると思われる。第1号溝状遺構の南側は、東側に拡張して調査を進める。

8月30日(晴) 調査の日数も残り少なくなってきたので各遺構ともまとめの段階にはいる。1号・2号配石は、断面を図にとりベルトをはずす作業を行なう。第1号溝状遺構の南側は、ほぼ拡張を終え、掘ってない土壇あるいはピッ



発掘風景

トを掘り写真を写す。土坑、ピット、柱穴群に区分できそうである。第3号址北側に新たに溝が見つかったため、急いで調査を行なう。また溝の付近にピットが確認されたため、拡張を行なう。第2号溝状遺構とする。

8月31日(曇) 台風16号接近、本日午前中現場の片付けを行なう。器材を宮田福祉センターへ返す。11時半より解団式を行なう。午後、団長・調査員・補助員により第1号溝状遺構、土坑、柱穴群の測量を行なう。

9月1日(雨) 団長、調査員、補助員により第3号址、第2号溝状遺構、焼石炉の測量を行なう。

9月2日(雨) 本日も雨の中で測量を行なう。全体測量を友野、第2号址を伊藤・草野、配石を赤羽が中心となって行なう。

9月3日(晴) 本日で現場を終りとする。配石は写真を写し石を取り上げる。その下より溝



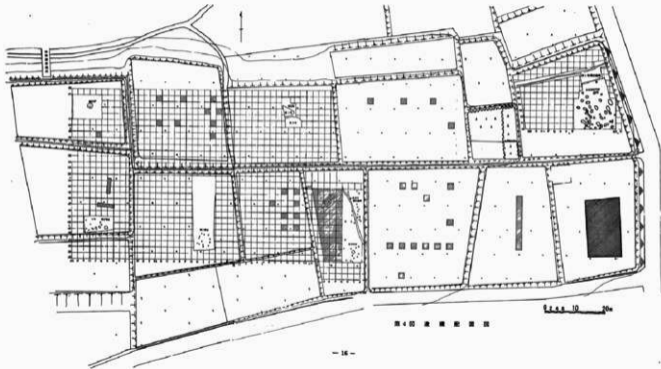
発掘風景

が検出されたため溝を掘り上げ再び写真を写す。焼石炉は断面を記録し掘り上げる。底は敷石となっていた。

(伊藤 修)

参加者名簿

北沢雄喜、吉沢文夫、気賀沢紀敏、田中清文、湯沢康人、北村隆志、北村 昭、堺沢貞幸、
(以上辻沢遺跡群研究会)、高谷秀雄、宮下昌一、宮下定美、那須野万治、伊藤忠一、後藤あさ子、小幡 弘、福島兼作、星野一雄、大沢初子、米山さかえ、宮下金美、岩村 等、細川一男、桃沢まゆみ、北沢保夫、竹沢幸子、倉田源重(駒ヶ根市)、飯島中学校生徒 熊谷洋子(願不同)



第 3 章 遺構・遺物

第 1 節 遺 構

今回の調査で、ピットを中心とした遺構が 3 箇所、溝状遺構が 2 箇所、土坑及び柱穴群、配石址、焼石伊が検出された。

第 1 号址 (第 5 図 図版 2)

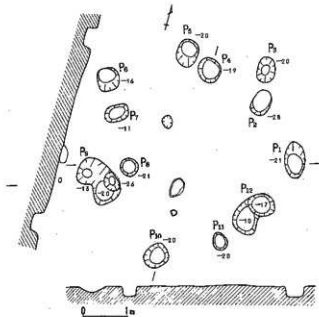
発掘調査地区の中央やや南西、グリット番号 B141 を中心に検出された。開田前に東側あるいは南側に傾斜があったため、遺構の西側は取り土、東側は埋土となっている。このためプランの規模については明らかでないが、石を中心としてピットが不規則ではあるが円を描いており、円形のプランと考えられる。

ピットあるいは石は、耕作土からかぞえて三層目の褐色土上面にあり、褐色土

上面を生活面と考えてもよいのではないだろうか。褐色土上面には、部分的に硬い面があったが、床面となりうるような状態ではなかった。石には、熱を受けた痕跡がある。

遺物は、土器片 (第 14 図 № 1~9) と石鏃 (第 15 図 № 13) が出土した。土器片は、遺構の東側、埋土及び黒土層より比較的まとまって出土しており、開田の時に西側から移動したためではないかと思う。いずれにせよ、第 1 号址の遺構にともなう遺物であることは間違いない。

(伊藤 修)



第 5 図 第 1 号址

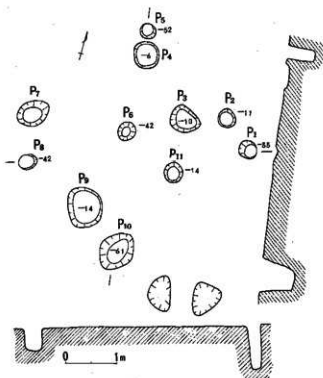
第2号址 (第6図, 図版2)

発掘調査地区の西端, グリット番号AP 43を中心に検出された。ローム上層のピットを中心とした遺構である。ローム上層には, 床面となるような硬い面や焼土, 焼石はみられなかった。ピットには10m前後の浅いものと, 30m以上の深いものの2種類に分けられる。深いものには, P₁, P₂, P₃, P₄, P₅, P₆, P₇, P₈, P₉, P₁₀があり, P₅を除けば1辺3m前後のほぼ正方形となり四本支柱の遺構ではなかったかと考えられる。

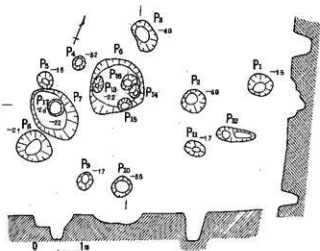
遺物は, 褐色土層より小破片(第14図No.10~17)石鉄(第15図No.12)が出土した。(伊藤 修)

第3号址 (第7図 図版3)

発掘調査地区中央やや南側, グリット番号CH 39を中心に検出された。遺構付近は取り土となっているため, 地場下はローム層であり, 検出された遺構がもとの状態のままであるか明らかでないが, いずれにして



第6図 第2号址



第7図 第3号址

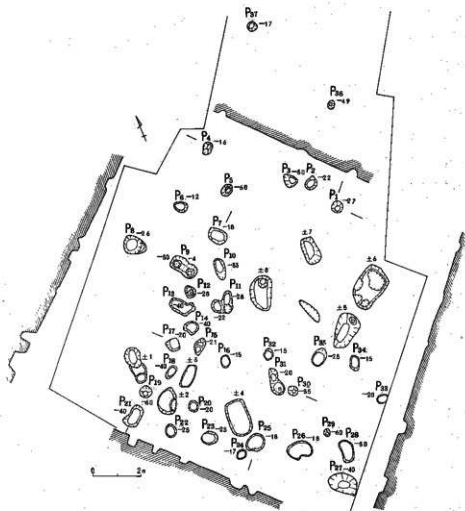
もピットを中心とした遺構である。

ピットは、直径1 = 20 =前後の大形の浅いもの（P₆、P₇）と、直径30~40 =前後の小形のものに分れる。大形のP₆を中心として小形のものが見られているようにもみられるが、はっきりした規則性はみられない。ローム層に硬い面はみられず、P₆付近より少量の炭化物が検出されただけである。

遺物は、陶器片が1点（図版8の5）だけである。

（北沢雄喜）

土坑及び柱穴群（第8図 図版3）



第8図 土坑及び柱穴群

(土 塚)

調査地区の東端、グリット番号でいえばDT~EA, 60~64に検出された。台地の中央部であり、西から東に向って緩やかな傾斜となっている。北側は、第1号溝状遺構となっている。層位は、上より耕作土、地場、ソフトロームとなっている。土塚は、ソフトロームを掘り込んでおり、ソフトローム上層からは炭化物が検出された。土塚内部から遺物は発見されず、周辺から陶器片(図版8)が出土した。

土塚1 74×160cmのひょうたん形を呈している。主軸を南北に置き、60cmの深さがあるが中間部分が15cmと浅く、凸形の底部をしていることから、土塚墓としての可能性は薄い。

土塚2 1号の南方1mにあり、80×112cm、深さ43cmの円形プランを呈している。壁面はわずかなたきとなっている。覆土中には多量の炭化物と共に骨粉と思われるものが少量出土しており、墓としての使用が考えられる。

土塚3 1号と2号の中間に位置し、48×100cm、深さ20cmの方形プランを呈している。底部はほぼ平坦である。

土塚4 85×150cm、深さ20cmの方形平底状であり、土塚3のプランと似ている。

土塚5 96×160cm、深さ30cmの方形プランを呈している。壁は30°の緩やかな傾斜であり、斜面に小形ピットが認められる。

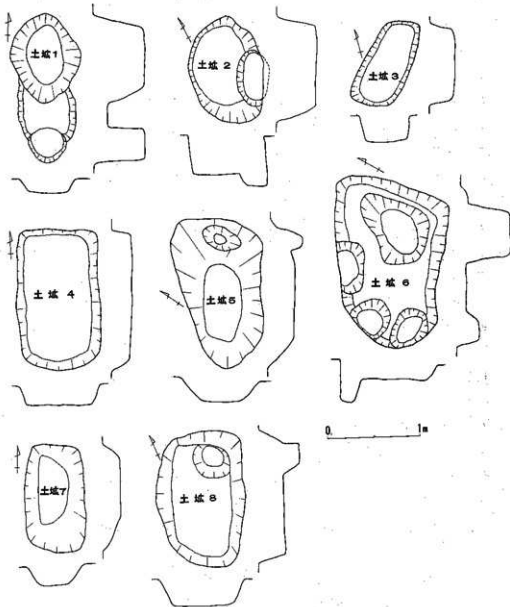
土塚6 120×180cm、深さ60cmと土塚群中最大の規模を呈する。土塚内に4個のピットを伴う。

土塚7 土塚群北端にあたり、65×115cm、深さ20cmの方形プラン、舟底形の底部をなしている。

土塚8 100×145cm、深さ30cm、西側が丸みをもつ方形のプランを呈している。底部北側には、径40cm、深さ50cmほどのピットを伴っている。

(柱穴群)

第1号溝状遺構の南側に位置し、ソフトロームを掘り込んでいる。東西16m、南北20mの範囲中に径60~120cm、深さ12~60cmのピットが37個点在している。その分布状況は南側にいく程多くなり、又南側部分10mに於いては土塚群と混在している。その形状は円形がほとんどであるが、方形であったり2つの円形の組合わりによるひょうたん形であったりするものもある。建造物の柱穴とも考えられるが、規則性に乏しく断定し難い。しかし、中には、P₁₇、P₁₈、P₂₁、P₂₃を一边、P₁₁、P₁₄、P₁₂を一边、P₂₂、P₁₃、P₁₅、P₂₄を一边、P₁₆、P₂₀を一边とす



第9図 土城

る約5.8×3.8mの方形の柱穴址と思われるものもある。

第1号溝状遺構（第10図 図版4）

調査地区の東縁，グリット番号でいえばDJ 67からDY 70にかけて検出された。遺溝はローム層を掘り込んでおり，西側と南側から緩く傾く地形であり，南側に於いて柱穴，土坎群と接している。

北西から南東にはしるこの遺構は，最大巾60cm，平均40cm，一番深い所で25cm，平均15cmほどの深さを持ち，長さが31mまで検出されている。道路に分断されてしまい確認できないが，東方へはかなりのびているものと思われる。

本遺構で注目されるのは，溝状内にあるピット列である。19個を数えるこのピットのグループを西から順にP₁，P₂，P₃……P₁₉とすると，P₃～P₄は2.8m，P₄～P₇は2.2m，P₇～P₉は3m，P₉～P₁₁は2.9m，P₁₀～P₁₄は2.4m，P₁₁～P₁₅は2.9m，P₁₅～P₁₇は2.6m，P₁₇～P₁₈は2.1mとなっており，2～3mというほぼ等間隔にピットが認められる。これら19個のピットは，深さ10～40cmであり，ほぼ垂直に掘り込まれているところから，この遺構の性格は木柵ではなかったかと考えられる。しかし上伊那地方に於けるこの種の類例が報告されていないので，資料をまわって，さらに検討を要する問題となろう。

溝状遺構内より遺物の出土はない。

（丸山・草野）

第2号溝状遺構（第10図 図版4）

調査地区のほぼ中央，グリット番号でいえばCG 49から南東にCJ 40にかけて検出された。西高東低の舌状台地であるため，溝もそれに従って北西が高く南東に低くなっている。巾は，広い所で70cm，狭い所で30cmくらいで，ローム層を15～35cmほど掘り込んで作っている。溝の断面は，U字状のところあり，V字状のところあり，二段になっているところありで，全く規則性がみられない。覆土は黒褐色土であり，溝底には砂利の層は認められない。溝はさらに北西，南東に続いており，溝の全貌が明らかにできないため，その性格については不明である。また溝の付近からは，計20個ほどのピットが検出されており，溝と関連あるものかどうか問題である。P₁，P₂は，溝を切っており，溝と関連のないものとするれば，溝よりも後になって作られたと考えられる。また，溝の北側で北東に2mほど張り出した部分がみられる。断面はU字状で，比較的平坦である。

遺物は，溝内より打製石斧（第15図№2）が1点出土しただけである。出土遺物からみて縄文時代と考えたいが，調査が充分でなく，遺物も少ないことから，結論をだすのはひかえたい。

（伊藤 修）

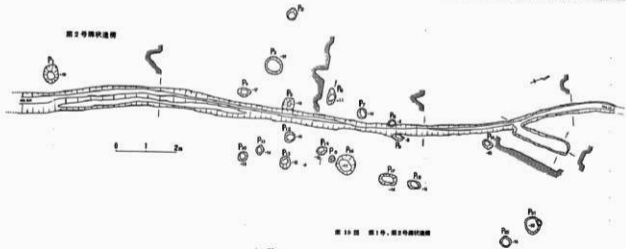
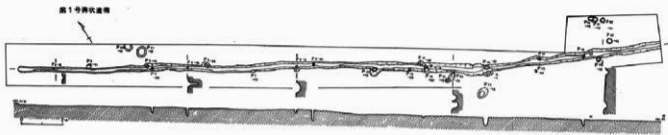


图 10 图 1 号、图 2 号透骨状

配石址 (第11図, 図版5)

B区V~X, 60~64にわたっており, 北側の第1号配石, 南側の第2号配石を中心に溝状遺構, 土壇, ピットも検出された。

(第1号配石)

BW62グリットを中心に検出され, 學大から人頭大の自然石によって構成されている。検出された配石は50個程度であるが, 北側へ若干広がっているものと思われる。礫は殆んどが花崗岩及び縞状片麻岩であり, 遺跡南東の子生沢等の沢から運ばれたものであろう。配石は全体に無雑作に置かれ, 雑然としている。しかし, 中に一部カマドに類似する部分があるが焼土, 焼石は検出されなかった。また層位的にこの配石は第3層黒色土層上面にあり, 第3層を旧表土層とすれば, 少なくとも開田時には表面に露出していたことになる。或いは造成時に埋土の下に故意に置いたものかもしれないが, おそらく第3層に埋まっていたものではないであろう。

遺物は, 配石と同レベルより出土せず, 第5層の灰褐色土上面から鉄製品, 銅製品, 陶器の破片が出土している。更に炭化木材の細片が第5層及び第5層上面より極少量検出された。これらの遺物, 炭化物は何れも点在しており, 量的にも少なく陶片はかなり距離を隔てても接合するものがあつた。しかし配石に伴うと考えられる遺物は1点も出土しなかった。

(第2号配石)

BW60グリットを中心に検出された。第1号配石同様學大から人頭大の自然石を配したものである。大部分花崗岩と片麻岩の河原石で, 検出されたものは, 100個近くにはのぼる。南側へ更に続いているものと思われるが, 全体に若干東へ傾斜していて, 礫は部分的に重なりながらも, ほぼ平面的な集合状態を呈している。しかし敷きつめたという状態ではない。雑然としているものの, 成いは見方によっては幾つかの集石よりなる集石群として促えることができるかもしれない。層位的には第5層上部から第4層下部に及んでいる。

石の配されている第5層は, 灰色の粘性の強い層で, 全面に酸化鉄の付着した土壌粒子が含まれており, 石の表面に付着していた。この第5層は, ほぼ第1・2号配石のある範囲に限られており, 極めて薄く均一的に堆積していることから, 配石の前に人為的に敷かれた礫でもある。焼土の検出は皆無であった。

遺物(第14図 図版9)の出土は, ほぼ第5層から第4層下部に限られている。

また第1号と第2号配石の間の土坑付近からは、骨片と鉄製品が検出された。骨片については、詳しく調べてないので明らかでないが、人間の骨にしては、大きすぎる感じであり、馬などの家畜でないかと考えられる。

(溝状遺構)

配石の下から溝状遺構が検出された。第1号配石付近で若干西よりにカーブするが、ほぼ南北に走り、C地区の第2号溝状遺構と続きのものであるとも考えられる。深さ約30~40cm、巾20~40cmの断面U字状の溝である。覆土は3層に分けられ、極めて細かな砂が微量第9層、第10層付近に認められた。この溝は、ローム層及びその下部付近から切り込まれており、東壁は配石に依って上半部が削り取られたものと思われる。また北へ行く程底面のレベルは若干高くなっており、巾も狭くなるようである。

遺物は発掘した部分からは全く検出されず、時期決定は困難であるが配石址よりは明らかに先行するものである。

(土坑)

第1号・第2号配石の間に検出されたもので、第5層の下が直接ソフトロームになる部分で、ロームを掘り込んで構築されている。配石址によって若干上部が削られているものと思われる。長軸100cm、短軸50cmの双円形の土坑で南東方から北西方に長軸をとる。壁に段を有し、底は船底形を呈する。内部にはほぼ一様に黒色土が充満し比較的しまっていた。遺物・人骨等は全く検出されなかった。

(その他)

溝状遺構の西側、配石址の東側にピットが計3個検出された。P₁は、直径約40cm、深さ21cmで断面はすり鉢状である。P₂は、直径約45cm、深さは鍋底状に掘り込んだもので9cmと極めて浅い。どちらも覆土はしまっていた。遺物は、P₁の覆土に炭化物が微量含まれていたのみである。P₃は、直径約30cm、深さ13cmで鍋底に近い平底を呈する。覆土は軟質であった。遺物は検出されなかった。

配石址の南東には、ロームの敲き部分が検出された。これは、直径約45cmのほぼ円形で、ソフトローム上面に貼られたような状態であったが、下部からは、何も検出されなかった。付近より土器細片の出土があった。

(赤羽義洋)

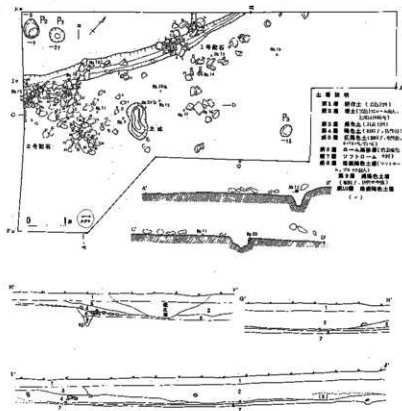
番号	B	2	B	3	A	4	A	5	B	6	B	7	B	8	A	9	B	10	B
11	B	12	B	13	B	14	C	15	B	16	A	17	A	18	B	19	B	20	B
21	A	22	B	23	B	24	B	25	B	26	B	27	B	28	B	29	A		

第1表 第1号配石址石質表

番号	B	2	B	3	B	4	B	5	B	6	A	7	B	8	B	9	B	10	A
11	B	12	B	13	B	14	B	15	A	16	B	17	C	18	B	19	B	20	D
21	D	22	A	23	A	24	B	25	A	26	A	27	A	28	B	29	B	30	A
31	B	32	B	33	D	34	A	35	C	36	A	37	A	38	A	39	A	40	D
41	B	42	B	43	B	44	B	45	B	46	A	47	?	48	B	49	B	50	B
51	A	52	D	53	B	54	A	55	B	56	B	57	A	58	D	59	B	60	B
61	B	62	A	63	B	64	B	65	B	66	B	67	A	68	B	69	B	70	B
71	A	72	B	73	A	74	B	75	B	76	B	77	A	78		79			

第2表 第2号配石址石質表

A=扁平片麻岩 B=黒雲母花崗岩
 O=高雲母花崗岩 D=花崗片麻岩



第11図 配石址

焼石炉（第12図，図版6）

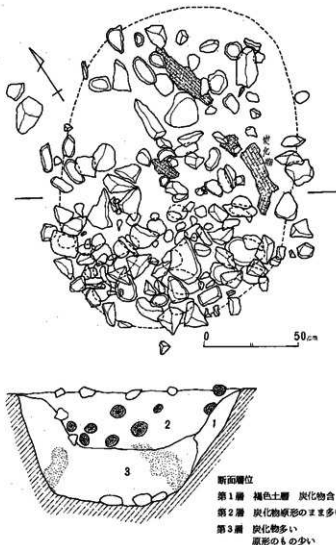
調査地の北西に検出された。集石は褐色土層上に形成され、直径1m 50cmのはほぼ円形を呈している。集石に使用されている石の大きさは、20cm前後で、数は約220個からなり、そのほとんどは火を受けている。石質は、片麻岩、花崗岩、砂岩等からなっている。

集石の下部は落ち込み、長軸160cm、短軸130cm、深さ60cmの楕円形をしたすり鉢状の穴となる。なお底は径70cm前後の円形である。落ち込みの内部には石はあまりなく、炭化物を含んだ黒色土で充填していた。落ち込みの上部から30cm前後は、ほぼ原形に近い炭が多く検出された。木質は、ナラ・サクラ等の堅い木と思われる。焼土は、全体に認められた。

底からは、比較的平らな20cm前後の石が9個、明らかに敷きつめたと思われる状態で検出された。9個とも熱を受けていた。

集石の回り、特に北東側より焼石が多数だが、水田造成の際、集石付近が取り土となった為、一掃に運ばれたものと思われる。

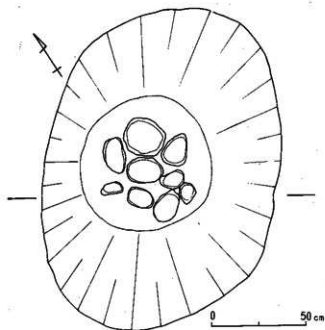
出土遺物は、焼石炉北側の黒色土層より打製石斧（第15図No.1）が1点出土した。また西側より土器片が1点出土してい



第12図 焼石炉

るが、時期の解明は不可能である。

なお焼石炉内からは、遺物は1点も出土しなかった。（吉沢文夫）



第13図 焼石炉底部

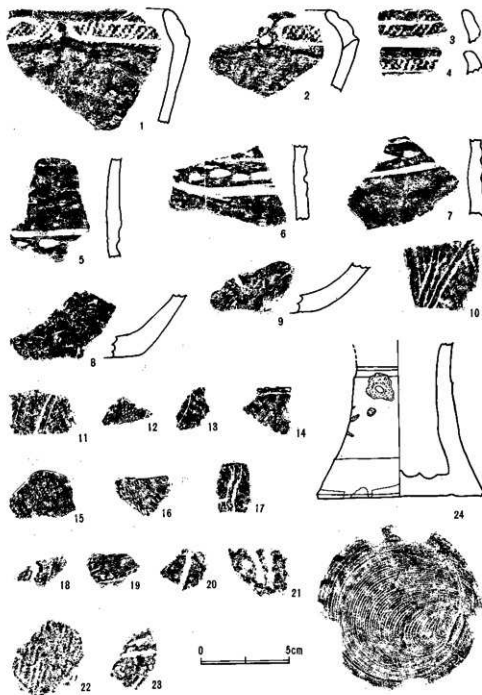
第2節 遺物

土器（第14図）

土器は第1号址から比較的まとまって出土しており、他から出土した土器片は量も少なく文様が多少わかる程度のものである。

第1号址の埋土、あるいは埋土下の旧表土である黒褐色土より出土した土器の大部分は無文であり、№1～9はその中の文様のあるもの、底部などである。復元を試みたが形にならず、土器の色調、胎土、器形から考えておそらくは1個体、多くとも2個体くらいではなかったかと思われる。縄文後期でも古い時期のものではないかと考えられる。

№1は出土した土器片の中でも大きなものであり、時期決定の手掛かりとなる土器である。口縁部が内傾し、そこから下へ胴部に向ってゆるやかにくびれ、胴部で小さくふくらむ器形でないかと考えられる。№5、6、7は胴部付近の破片であり、同一個体かどうかは明らかでないが、このような傾向をしめしている。№1、2、3とも内傾する口縁部を沈線により横に長く区画し、その中は縄文が施されている。いずれも赤褐色、あるいは黄褐色を呈し、



第 14 圖 土器拓影・陶器実測図

胎土には長石が含まれている。№2は、縄文の区画の間に、たてに2つ円形の刺突文が施されている。№5, 6, 7は同一個体であり、横走る2条の沈線の間を、へら状の工具と思われる一条の刺突文が施されている。色調は黄褐色を呈しており、長石が含まれている。底部は№8, 9の2点だけであり、黄褐色を呈し、胎土に長石が含まれている。

№10~17は、第2号址褐色土層より出土したものである。いずれも赤褐色を呈し、胎土中に雲母が含まれている。№10は、半截竹管による沈線が施され、一部に縄文がみられる。12~17は、いずれも地文に細かい縄文を施し、№13・14・17は、その中に沈線がみられる。

№18~23は、遺構とは関係なく出土したものである。小破片である為、時期は決定できないが、文様、胎土、厚さなどから考えて大部分は縄文時代中期に属すると思われる。№18は、縄文と沈線が施されている。色調は褐色を呈し、胎土に長石が含まれている。№19は、赤褐色を呈し焼成は良く厚手である。№20は、1条の沈線が施され、黄褐色を呈し厚手である。№21は、2条の沈線と円形の刺突文が施されている。胎土に長石・石英が含まれている。№22は、地文に縄文が施され赤褐色の色調を呈している。№23は、表面が磨滅しているため明らかでないが沈線と押し引き文が施されていると思われる。黄褐色を呈する。

石器 (第15図)

今回の調査で打製石斧7点、横刃形石器3点、石鏃4点の計14点が出土した。

打製石斧(第15図№1~7)

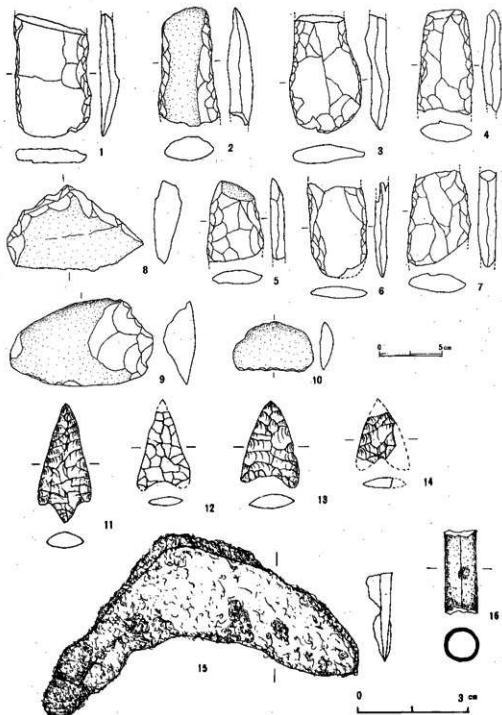
打製石斧は完形品が1点もなく、いずれも破損している。形からみて、短冊形の石斧である。№1は、焼石炉付近の黒土層から出土したものであり、石材は伊那市以北に多いホルンヘルスである。№2は、第2号溝状遺構より出土したもので、石材は硬砂岩である。№5は、第2号址の褐色土より出土したもので、石材は硬砂岩である。№3, 4, 6, 7は、遺構以外より単独で出土したものであり、№6の緑泥岩を除き他は硬砂岩である。

横刃形石器(第15図№8~10)

横刃形石器は、いずれも遺構とは関係なく、単独で出土した。№8~10は、硬砂岩を石材としており、自然面の一部を打ち欠いた簡単なものである。

石鏃(第15図№11~14)

石鏃は、4点のうち№12を除き他は黒曜石製である。№11は、調査地区の東側より単独で出土したもので、両面とも丹念に調整されている。№12は、第2号址の褐色面より出土したもので、先と底辺の両端が欠けている。№13は、第1号址の黒土層より出土したもので、



第15图 石器・金属製品実測図

両面とも比較的良く調整されている。№14は、第1号溝状遺構付近から出土したもので、わずかに石鏝としての形をとどめている。

金属製品（第15図）

鉄製品（第15図№15）

刃部の長さ約6cm、柄部の長さ約4cmの刃に対して柄が110度で取り付けられる鉄製品である。刃部の断面は、上部で3mmほどあるが刃部は鋭く、恐らく鏝として使われたのではないと思われる。保存状態は良い。B地区より出土。

銅製品（第15図№16）

直径9mm、長さ22mm、厚さ1mmの円筒形の銅製品である。両端とも欠損している。中央部には、縦に接合した跡がみられる。表面は凸凹している。配石址より出土。（伊藤 修）

陶磁器（図版8、9、10）

1は、D地区北側より出土した須恵器の坏である。灰褐色を呈し焼成は良好、猿投窯産、奈良時代末期。2は、D地区北側より出土した山茶碗。垂釉、灰色、焼成は良好、瀬戸系の窯で焼かれたもの、器面に水引痕が見られる。鎌倉時代。3は、D地区北側より出土したものの、須恵器の蓋である。色調は灰褐色、焼成良好、胎土は黄白色、猿投系で室町時代。4は、深い小血の口縁部破片、灰釉、瀬戸系の窯で焼かれたもの。室町時代。5は、OI41グリット出土の鉄釉碗の口縁部である。胎土は灰黒色瀬戸窯、施釉は黒色。江戸時代中期のもの。6は、天目茶碗である。胎土は灰白色、焼成良好、江戸時代中期。7は、D地区の南側より出土した鉄釉耳付壺の蓋の破片である。胎土は灰黒色、焼成良好、表面には施釉がなく黒釉が付着している。8は、染付の磁器、器形は碗、染付は青色、鴉、瀬戸、江戸時代末期。9は、2号配石から検出された陶器の摺鉢。良く仕用したのか磨減が甚しい。胎土は黄灰色を呈し焼成は良好、釉は表裏に施されている。江戸時代中期。10は、1号配石から検出された灰釉皿の底部、呉須絵、瀬戸窯。江戸時代中期。11は、2号配石から検出されたそり筒用器。釉は鉄釉である。胎土は灰褐色、瀬戸で焼かれたもの。江戸時代中期。12は、1号配石から検出された灰釉の碗である。薄手で釉が器面全体に施されている。産地は瀬戸、江戸時代中期。13は、1号配石から検出された呉須絵皿の灰釉陶器である。口縁部の破片、内側に青の染付がみられる。胎土は灰色、焼成良好、江戸時代中期。14は、灰釉の碗である。胎土は灰褐色、口縁部破片、江戸時代中期。15は、2号配石より検出された灰釉の碗、胎土は灰褐色、焼成良

好、江戸時代中期。16は、2号配石より検出された灰釉の碗である。胎土は灰色、焼成は良好、釉調は薄い黒色の斑点がみられる。江戸時代中期。17は、C地区出土の灰釉陶器、瀬戸窯、色調は黄灰色、胎土は灰褐色を帯ている。焼成良好、江戸時代中期。18は、B地区出土の灰釉碗、瀬戸窯で焼かれた江戸時代中期のもの。19は、D地区南より出土した鉄釉碗である。胎土は赤褐色の薄手の陶器。窯は不明。江戸時代中期。20は、C地区出土の鉄釉の壺壺。胎土は灰黒色、焼成良好、瀬戸窯産。江戸時代中期。 (友野良一)

第Ⅳ章 所見

柏木北垣外遺跡の調査の結果知り得た2, 3の事実について所見を述べてみたい。

1. 住居址として取り扱えるものは検出できなかった。ピットが柱穴状に配列されているものや、壁の一部と思われる部分など認められたが、住居址と認定するまでにはいたらないため第1・2・3号址とした。遺物は第1号址から縄文時代後期の土器片が、第2号址から縄文時代中期後葉の土器片が第3号址からは遺物は出土しなかった。

2. 土坑 DT-EA, 60~64に8箇所検出された。ソフトロームに掘り込んで作られており、形状は円形、楕円形、方形ときまざまであり、大きさは45~180cm、深さは25~60cmを計る。遺物は土坑内からは1片も発見されなかったが、周辺からは須恵器(奈良時代)、山茶碗(鎌倉時代)、鉄釉耳付壺(江戸時代中期)等が出土している。遺構との関係は不明である。

3. 柱穴群。第1号溝状遺構の南側、土坑群に混じって検出された。ソフトロームを掘り込んで作られており、東西16m、南北20mの範囲に作られた柱穴群である。P₁₇, P₁₅, P₃₂, P₃₃の1辺, P₁₇, P₁₈, P₂₂の1辺, P₂₂, P₂₃, P₂₅, P₂₆の1辺, P₂₆, P₃₃の1辺の柱間間隔は、18尺(3間)×10、4尺で方形の建物址として考えられるが、他の柱穴は配列が不規則であるため、掘立建物址として取り扱えないものである。遺物が検出されなかったため時期は不明である。

4. 第1号溝状遺構。柱穴址の北側に検出された遺構である。溝の長さは西は畑で削られており明らかでない。東は秋葉街道によって分断されているため終末の状態を知ることができない。溝の巾は平均40cm、深さ15cmを計る。形状はほぼ直線の溝である。本遺構の特筆す

べきことは、溝内に2～3m毎に平均径20cm内外、深さ10～40cmのピットが検出されたことである。溝状遺構は、上伊那郡南箕輪村大芝東遺跡から本遺構と同じ溝状遺構が検出されているが、溝内にピットが確認されたのは、私の知っている範囲ではこれが初めてである。したがって、この等間隔のピットが何を意味するか。木柵ではないかという意見もあったが、この種の類例が報告されていないので今後資料の増加をまって検討したい。遺物は発見されていないので時期は不明である。

第2号溝状遺構は、遺跡の中央付近に検出された遺構である。長さは水田造成の時に破壊され、その起終点を知ることはできなかった。遺構の巾は30～70cm、深さ15～35cm、V字形をなし、南に行く程深くなっていたが、水が流れた跡はみうけられなかった。第1号溝状遺構とは異なり、溝内にピットは検出されなかった。第1号・2号溝状遺構の性格は、異っていたものと思われる。また溝の附近から20個のピットが検出されたが、あまりにも不規則な配列で掘立建物址とは考えられないものである。遺物は溝内から縄文時代の打製石斧が発見された。

5. 配石址。第1号配石址は、BW62グリットを中心として検出された遺構である。配石は近くを流れる子生沢の自然石を用いて作られたものである。配石の状態は、雑然とはしているが、なかには炉址状に組まれた箇所が見受けられるところより、配石址として取り扱うこととした。配石に伴う遺物は発見することができなかったが、配石と同じ面からは金属製品、江戸時代中期の陶器片が出土した。

第2号配石址は、BW60グリットを中心として検出された配石址である。配石は、自然石100個近くを雑然と平に並べた状態に見受けられる構成である。遺物は第4層下部から第5層に限られて発見された。摺鉢・鉄軸の筒用器・灰釉の碗等江戸時代中期のものである。第1号第2号配石は、出土遺物からして江戸時代中期に作られた遺構であると考えられる。

配石址の下から検出された溝状遺構は、配石より先行するものであることは確かであるが、遺物が伴出しないので、その時期を明らかにするにいたらなかった。

第1号・2号配石の間に土坑が検出されたが、これも溝状遺構と同様、遺物が発見されなかったため、その時期を明らかにすることはできなかった。

6. 焼石炉。焼石炉という名称については種々と問題はあろうと思うが、ここでは一応焼石炉として扱うことにした。大きさは長軸160cm、短軸130cm、深さ60cm、摺鉢形の炉である。石は表面に集中的に置かれた状態となっている。表面の石は、ほとんど火を受けている

が中には火を受けていない石も混じっていた。こうした状態は、私が調査した駒ヶ根市赤穂養命酒駒ヶ根工場内出土の縄文早期の焼石炉、上伊那郡箕輪町並木下遺跡縄文前期と考えられる焼石炉、伊那市富県三つ木遺跡縄文早期の焼石炉の例があげられるが、いずれも表面の集石状態は同じであるが、炉内の集石状態はそれぞれ異なっている。

並木下遺跡の場合は、ほとんど底部まで平均した状態で石が詰まっていた。養命酒遺跡の場合は、表面に石が密集していたが、炉内は黒色土に混じって石はまばらであった。また炭化物も多量に含んでいた。本遺跡の場合は、表面の集石状態は同じであるが、炉内には石は僅かしか詰まてなく、燃えきらない薪に土をかけて消したと思われる状態であった。三つ木遺跡の場合は、炉内で火を焚いたというよりむしろ他で焼いた石を集めたというような状態であった。

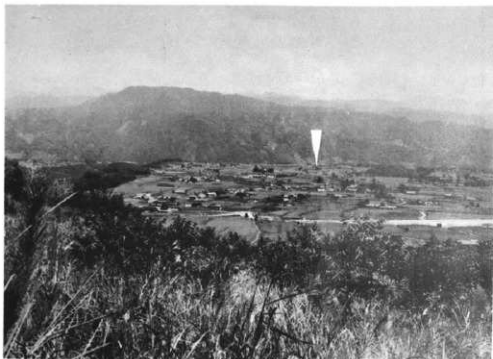
こうした例から考えて、焼石炉の使用目的は同一であるが、焼絶時の方法が異っていた現象と考えるべきであろうか。まだ焼石炉については類例が少ないので今後資料の増加をまって考えたいと思う。焼石炉については養命酒駒ヶ根工場用地内遺跡で報告してあるので参考にしてみたい。

7 陶磁器。本遺跡からは多くの陶磁器が発見された。本文中にその詳細は記述しておいたので重ねて述べないが、最近この地方の発掘で中世の遺構にも注意がはられるようになりつつあることは、新しい考古学の分野の開拓として好ましいことである。陶器の分類にあたっては、瀬戸市教育委員会宮石宗弘先生に御指導を賜ったことを紙上をもって御礼申し上げる次第であります。

8. 地質。本遺跡附近は、上伊那地方としても有数のローム堆積地域で、地質調査を是非行ないたいと考えていたところ、秋田大学生福島史雄氏の参加を得たことは幸いであった。氏の献身的な努力によってローム層に対しX線分析が行われ、科学的な研究ができたことは今回の調査の大きな成果であった。詳細については本文を参照されたい。

本遺跡の調査に当っては、飯島町当局をはじめ長野県土地改良事務所、県文化課指導主事 榎原 健先生、地元の関係された皆様、瀬戸市教育委員会宮石宗弘先生に対し調査団を代表して心から御礼を申し上げる次第であります。

(調査団長 友野良一)



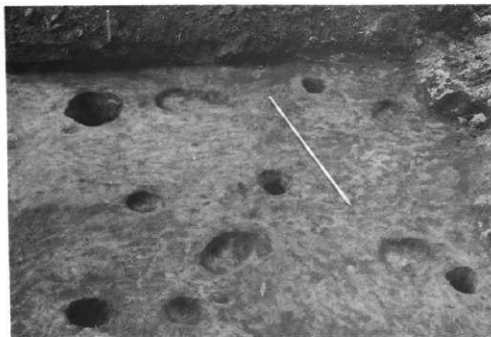
遺跡遠望



遺跡全景



第 1 号 址



第 2 号 址



第 3 号 址



圖 版 3

土 城 及 ひ 柱 穴 群



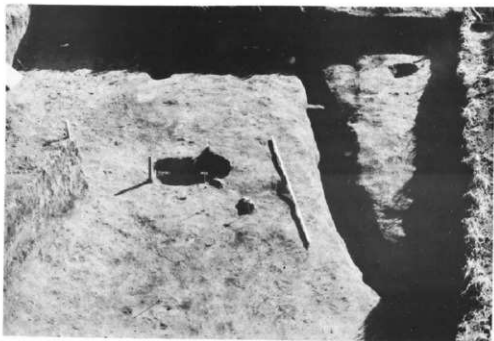
第2号溝状遺構（下）
第1号溝状遺構（左）



図版 4



配石 址



圖版 5

配石址内の溝と土城



烧石炉



烧石炉断面



烧石炉底部



土器片 (第1号址)



土器片・石器 (第2号址)



石器 (第2号海状遺構)



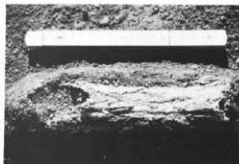
鉄製品 (B地区)



陶器 (配石址)



陶器 (配石址)



骨 (配石址)



木炭 (焼石炉)



1 須恵器 (D地区北)



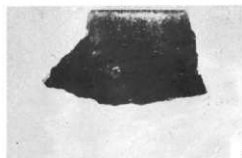
2 山茶碗 (D地区北)



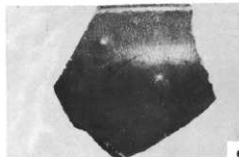
3 須恵器 (D地区北)



4 陶器 (その他)



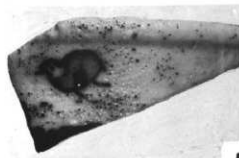
5 陶器 (CI-41グリット)



6 陶器 (その他)



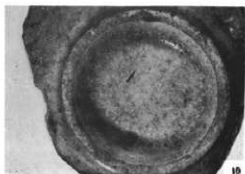
7 陶器 (D地区南)



8 磁器 (その他)



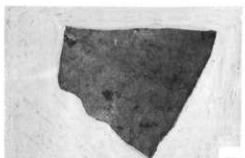
陶器 (2号配石)



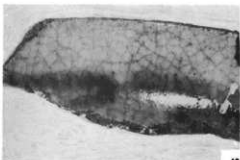
陶器 (1号配石)



陶器 (2号配石)



陶器 (1号配石)



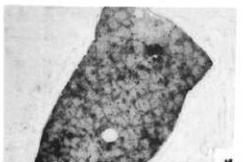
陶器 (1号配石)



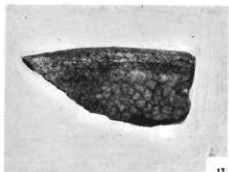
陶器 (その他)



陶器 (2号配石)

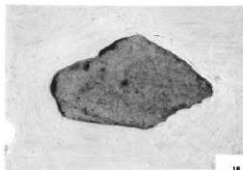


陶器 (2号配石)



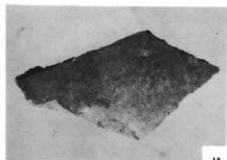
陶器 (C 地区)

17



陶器 (B 地区)

18



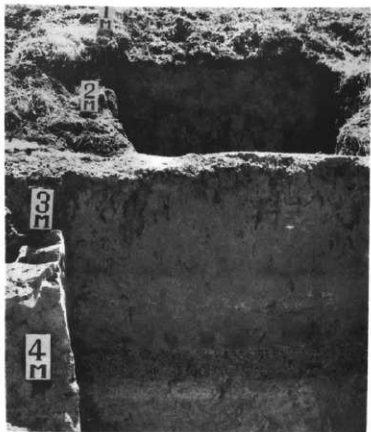
陶器 (D 地区南)

19



陶器 (C 地区)

20



地層断面



図版 11

記念撮影

柏木遺跡

凡 例

1. この調査は、は揚整備事業に伴う緊急発掘で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町教育委員会が実施した。
2. 本調査は、49年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。

友野良一、箕浦税夫、伊藤 修、和田武夫、山口 繁（順不同）

図版作製者

- 遺構及び地形

伊藤 修

- 実測図

伊藤 修

- 写真撮影

友野良一

4. 本報告書の編集は主として、飯島町教育委員会があたった。

挿 図 目 次

第 1 図 位 置 図	(4)
第 2 図 地 形 図	(5)
第 3 図 地 層 図	(6)
第 4 図 遺構配置図	00
第 5 図 第 1 号址	01
第 6 図 第 2 号址	02
第 7 図 ロームマウンド	03
第 8 図 第 1 号土坑	04
第 9 図 第 2 号土坑	04
第 10 図 第 3 号土坑	04
第 11 図 第 1 号ピット	04
第 12 図 第 2 号ピット	04
第 13 図 柱 穴 址	05
第 14 図 石器実測図	06

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠望・遺跡全景
図版 2	第 1 号址・第 2 号址
図版 3	ロームマウンド・ロームマウンド断面
図版 4	第 1 号土坑・第 3 号土坑
図版 5	第 1 号ピット・第 2 号ピット
図版 6	柱穴址・記念撮影
図版 7	遺物出土状況
図版 8	柏木地区の植物 (1)
図版 9	柏木地区の植物 (2)

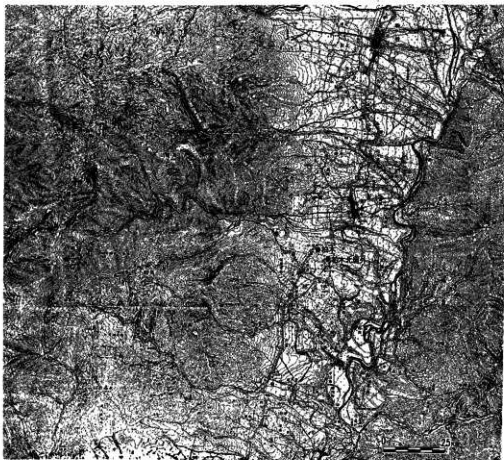
目 次

凡 例	(1)
目 次	(2)
挿図目次	(3)
図版目次	(3)
第 I 章 環 境	(4)
第 1 節 位 置	(4)
第 2 節 地形・地質	(6)
第 3 節 歴史的環境(柏木の地名と石造物)	(6)
第 4 節 柏木地区の植物	(7)
第 II 章 発掘調査の経過	(8)
第 1 節 発掘調査に至るまで	(8)
第 2 節 発掘日誌	(9)
第 III 章 遺構・遺物	(10)
第 1 節 遺 構	(10)
第 2 節 遺 物	(10)
第 IV 章 所 見	(11)

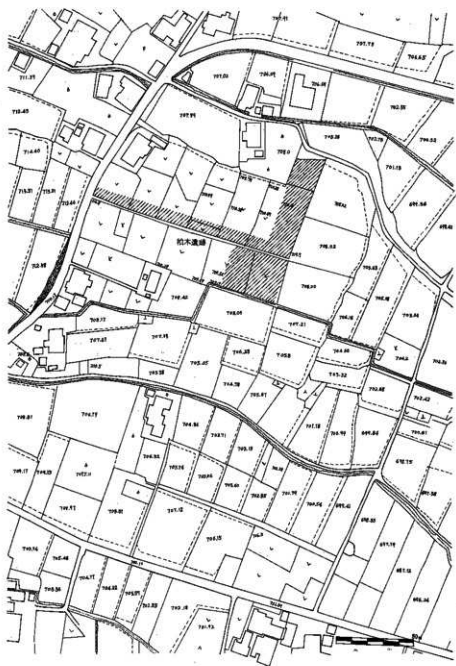
第I章 環 境

第1節 位 置

柏木遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字七久保 2558 番地に所在する。遺跡は、柏木部落のほぼ中央に位置しており、すぐ西には県道飯田・飯島線が通っている。また東側 400m のところには、柏木の堤がある。遺跡までの道順は、国鉄飯田線七久保駅で下車し、県道に出て北へ1kmほど行った所である。駅から直線にして、約1200mほどである。（伊藤 修）



第1図 位置図



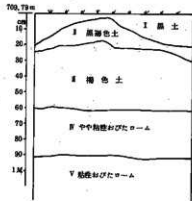
第2図 地形図

第2節 地形・地質

柏木部落は、中央アルプスに源を発する与田切川によってつくられた扇状地の扇状部分に位置している。しかしこの平坦と思われる地形も注意してみると、西から東へ向かって中小河川が走っており、それにより幾筋かの東西に細長い台地が形成されている。当遺跡も、このようにして形成された台地上に位置している。遺跡の北側及び南側は、東に向かって延びる窪地となっており、これらの窪地に挟まれた当遺跡は、比高4～7mのゆるやかな台地となっている。また東側は、扇状地としてのゆるやかな傾斜をもち、柏木北垣外遺跡を経て本郷の河岸段丘へと続いている。

柏木遺跡の地質については、柏木北垣外の報告の中で詳しく述べてあり、両遺跡共、同一地形上にあるということから、省略したい。ここでは調査地区のはば中央の地層について、少し述べてみたい。図にすると第3図のようになる。上から順に、まず耕作土としての黒色土が20cm、その下には黒褐色土が10cm、褐色土が30cmほどでローム層となる。ローム層は、上から30cmほどの間はやや粘性をおびたロームであり、それから下は粘性をおびたロームとなる。

(伊藤 修)



第3図 地層図

第8節 歴史的環境(柏木の地名と石造物)

柏木の地名は、同部落の高谷秀雄氏の話によると、往時この地に柏の大木があり、それが地名となったという説と、与田切川の沼蓋によって川止めが度々行なわれ、旅人が逗留のやむなきにいたり、かしぎ(炊事)が行なわれたので「かしぎ」の転化したものだという説の2通りがある。いずれにしろ現在の柏木部落の中ほどにある柏木集会所北の金毘羅・秋葉大権現碑の側に、文政十亥二月吉日、柏木講中とあり、更に同地の二十三夜塔及び道祖神にも弘化四未十一月柏木中とあるところを見ると、それ以前よりこの地域を柏木と言ったことは間違いない。

柏木部落の石造物についてみると、石仏10体(地藏菩薩2, 馬頭観世音3, 青面金剛童子3, 行者1, 不動尊1), 石塔60基(名号塔8, 供養塔6, 道祖神4, 庚申3, 二十三夜塔2,

馬頭観世音塔 30, 甲子 1, 金毘羅秋葉大権現 1, 蚕玉 2, 猫塚(3) で合計 70 基となる。建立年代の明らかなものは、江戸時代中期 10 基(宝永 1, 享保 6, 元文 1, 延享 1, 明和 1) 江戸時代後期 11 基(文政 3, 天保 2, 弘化 2, 嘉永 2, 安政 1, 万延 1), 明治時代 7 基で、江戸時代中期以後のものが大部分である。

第 4 節 柏木地区の植物

柏木堤付近は、低温地あり、乾燥地ありで、植物の種類は豊富である。植物調査の結果は次の通りである。調査にあたっては、飯島町郷土研究会植物部会の諸氏の御協力を得、且つ御教示を賜ったことを厚く感謝します。(山口 繁)

13) 以前にあって現存しない植物 計 5 種

オキナグサ, タヌキマメ, タヌキモ, ミミカキグサ, ミズゴケ

12) 現存している主な植物(改善事業により自生し難いと思われるもの) 計 30 種

カナビキノウ, コウホネ, クモイナズナ, モウセンゴケ, ノリウツギ, ウメバチソウ, ヤマアジサイ, シモツケ, ワレモコウ, カワラケツメイ, アヤマフウロウ, クロツバラ, クロカシバ, ヤマブドウ, ノブドウ, エビヅル, ヒメオトギリ, ミツバセリ, ヤマトラノオ, フヂリンドウ, ムラサキセンブリ, スズサイコ, オミナエシ, アゼムシロ, ヨシ, シロイヌヒゲ, ショウジョウバカマ, サギソウ, モジズリ, カキツバタ

13) 現存している主な植物(衰退してしまうと思われるもの) 計 39 種

アカソ, アキノウナギヅル, ツツラフシ, ゲンノショウコ, ウメモドキ, ツルウメモドキ, シナノオトギリソウ, リンドウ, スイカズラ, タツナミソウ, サルダヒコ, カキドウシ, アキノタムラソウ, ウツボグサ, ヘクソカズラ, マツムシソウ, キキョウ, ツリガネニンジン, ホソバノコウガイセイキョウ, ハリイ, エゾアブラガヤ, ネタルイ, ヒメネタルイ, テンツキ, カヤツリグサ, オニスゲ, コアゼテンツキ, ヒメアオカヤツリ, タマカヤツリ, ヒゲリコ, アゼガヤツリ, ビロウドテンツキ, フジバカマ, アズマヤマアザミ, ノハラアザミ, ヤマラッキョウ, ユウスゲ, ミズキボウシ, タチシオデ

14) 続いて繁茂すると思われる植物 計 74 種

ゼンマイ, オセシダ, メシダ, ワラビ, ヤマネコヤナギ, イラクサ, イタドリ, オオミゾタデ, イヌタデ, スカボタデ, アカザ, イノコズチ, カミエビ, アブラチヤン(ジシヤ), タケニグサ, チダケサレ, ヘビイチゴ, クマイチゴ, ノイバラ, コマツナギ, ナンテンハギ, ミヤマタニワタリ, ヤマハギ, ヒメクズ, ヤハズグサ, メドハギ, ムラサキツユユサ, クズ, ツリフネソウ, ツボスミレ, タチツボスミレ, ウド, タラノキ, チドメグサ, ヒルガオ, イヌゴマ, ヒメシロネ, カワラマツバ(スギナ), コウゾリナ, センダングサ, チチコグサ, ヨモギ(モチクサ), ヤマヨモギ(オオヨモギ), オトコヨモギ, ジシバリ, シラヤマギク, オオアレチノギク, ユウガギク, ヒメシオン, ノコンギク, ヨメナ, オモダカ, ヘラオモダカ, シバ, チカラシバ, エノコログサ, スズメノヒエ, クマザサ, オガルカヤ, メガルカヤ, ホシクサ, チゴザサ, スカビエ, ヒロバノスガグサ, スカキビ, イチゴツナギ, スカボ, チガヤ, メヒシバ(ハタカリメシバ), カゼグサ, ススキ, ツユクサ, イボクサ, マルバサンキライ(フキアゲ)

第II章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業七久保地区第1工区にある埋蔵文化財として柏木北垣外遺跡に続いて柏木遺跡発掘調査を南信土地改良事務所長から委託を受け調査を行なった。

経過を簡略に記してみよう。

昭和49年7月22日 南信土地改良事務所長から発掘調査協議の依頼がある。

昭和49年8月5日 長野県教育委員会桐原指導主事、南信土地改良事務所丸山技師、役場農林課垣沢主事、飯島町教育委員会事務局箕浦主事、伊藤主事で現地協議を行ない予算額を算出する。

昭和49年8月12日 県教育委員会から発掘調査計画書及び予算書が町教育委員会に届く。

昭和49年8月23日 南信土地改良事務所長から契約締結の通知がある。

昭和49年9月17日 南信土地改良事務所長と960,000円で契約締結。

発掘調査団

団 長 友野良一 (日本考古学協会会員)

調 査 員 伊藤 修 (飯島町教育委員会)

〃 和田武夫 (長野県考古学会会員)

調査補助員 北原健三 (飯島町文化財調査委員)

〃 宮下静男 ()

〃 片桐 修 ()

〃 山口 繁 ()

〃 桃沢匡行 ()

調査事務局 織田正己 (飯島町教育長)

〃 箕浦税夫 (飯島町教育委員会事務局)

〃 片桐文子 ()

(箕浦税夫)

第2節 調査日誌

11月26日(晴) 午前8時30分 発掘現場にて遺跡の概要、発掘調査の方法について説明を行ない調査を開始する。2m角のグリットを設定し掘り始める。調査地区の南東より土坑、ピットが見つかり検出された順に第1号、第2号土坑、第1号、第2号ピット址とする。テント西のBD50グリットより整穴が見つかる。南側、東側が耕作により攪乱をうけており、覆土、床面の状態、遺物量などから考えて住居址とは言い難い。第1号址とする。遺物は、石錘、石斧、陶器片が出土する。遺跡は中央のトレンチより近世の陶器の底部が出土し、付近を調査したが、遺構は検出できなかった。

11月27日(晴) 第1号址の南西よりマウンドが検出される。マウンドより石斧が1点出土する。マウンドの南から土坑が検出され、これを第3号土坑とする。寒さがきびしく朝の霜により遺構が崩れてしまうため、掘り上がった遺構は次々に写真を撮り実測を行なう。D地区テント東より柱穴が数個見つかり、付近の拡張を明日行なうことにする。

11月28日(晴) 昨日確認された柱穴付近の拡張に主力をそそぐ。テントを移動し、西側・南側へ拡張を行なう。ローム層まで比較的浅く、順調に調査が進む。マウンドの写真を撮り、実測を行なう。

11月29日(晴) 拡張の結果、柱穴の全体のプランが明らかになった。清掃をして写真撮影、実測を行なう。C地区南側よりピットとローム層上の硬い面が確認された。これも第1号址と同じように大部分は攪乱をうけており、遺構のプランは明らかでない。第2号址とする。

11月30日(晴) 測量と埋めもどしの班に分かれて行なう。測量は全体測量と第2号址。

12月1日(晴) 埋めもどし作業と地層の調査を行なう。

(伊藤 修)

参加者名簿

高谷秀雄、星野一雄、細川一男、伊藤忠一、竹沢悦子、竹沢幸子、後藤あさ子、橋場うめよ、桃沢まゆみ、高谷今代、山口須美、赤羽義洋、福島史雄、草野智子、辻沢遺跡群研究会 能谷洋子(順不同)



発掘風景

第三章 遺構・遺物

第1節 遺 構

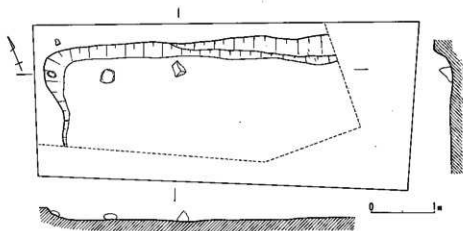
第1号址 (第5図 図版2)

調査地区の中央やや東から検出された。ローム層を30cmほど掘り込んで作られているが、東側・南側が耕作により攪乱をうけているため、プランの全貌は明らかでない。おそらく隅丸の長方形でなかったかと思われる。北側・西側の壁も不規則であり、北側では二段となっている箇所もみられる。遺構内部のローム層は、比較的柔らかく床面といえるような状態ではない。2箇所に石がみられるが、熱を受けた跡もなく、付近に焼土もみられない。

遺物は、覆土となる褐色土より打製石斧(第14図№1)、横刃形石器(同№3)、石錘(同№4)の3点が出土した。遺構内から土器片は出土しなかった。

遺構、遺物からみて、縄文時代の遺構であると考えられる。

(伊藤 修)

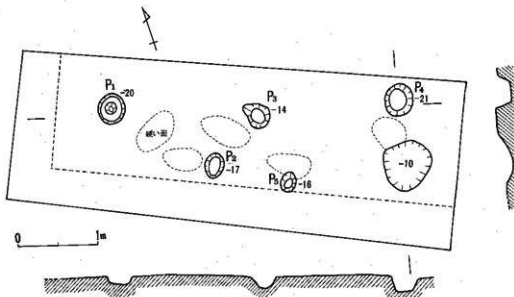


第5図 第1号址

第2号址 (第6図 図版2)

調査地区の南側より検出された。第1号址と同じように耕作により攪乱をうけており、プランの全貌は明らかでない。ローム層上を掘り込んだピットと硬い面よりなる遺構である。

ピットは、5箇所確認されたが、いずれも深さ20cm前後であり、調査範囲内では規則性はみられなかった。ローム層上に硬い面がみられるが、これは部分的であり床面となるような状態ではなかった。焼土、焼石、炭化物は検出されず、遺物も出土していない。(和田武夫)

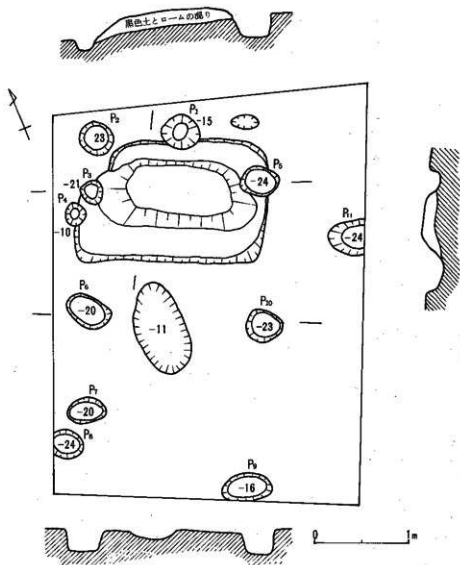


第6図 第2号址

ロームマウンド (第7図 図版3)

調査地区のほぼ中央より検出された。巾20~30cm、深さ10~20cm、の溝を方形に掘り上げ、土を内側のローム層上に盛り上げている。したがって盛り土は、黒色土とローム層の混合土である。盛り土は、70×170cm、厚さ15cmで中央部は平坦であり、西側、東側は、ゆるやかな傾斜となっている。ピットは、P₁、P₂、P₃、P₄、P₅の5箇所検出された。大きさは、直径20~40cmで深さ10~24cmとまちまちである。ピット間には規則性は認められない。5個のピットのうち、P₁、P₃、P₄、P₅は溝にかかっており、溝を切った形となっている。恐らくマウンドを作ったのと同時期か、それより後のものである。マウンドの両側からも6個のピットが検出された。いずれも直径40~50cmのもので、深さは20cm前後である。これらのピットがマウンドに関連あるものかどうかは明らかでない。マウンド、マウンド付近からは、焼土、焼石等は全く検出されなかった。

遺物は、溝の中より打製石斧(第14図No2)が1点出土した。これで時期を決定するのは危険であるが、他に遺物がない以上、重要な資料である事は間違いない。



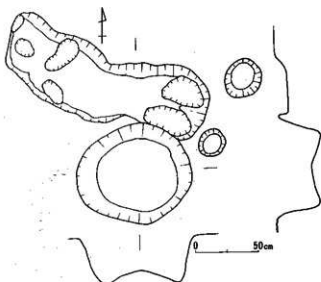
第7図 ロームマウンド

土坑及びピット (第8～12図 図版4, 5)

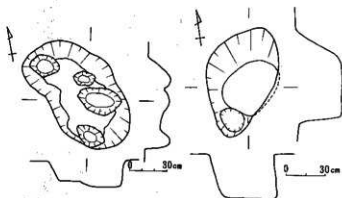
調査地区の東南より、土坑3、ピット2個が検出された。土坑とピットの区別については問題があるが、ここでは大きさと深さを基準にして分けてみた。

第1号土坑(第8図)は、柱穴址の南側より検出された。直径80cm、深さ30～40cmの円形

のものと50×160mの長方形のものからなる。円形の土坑の底部は、中央が10mほど高くなっている。壁は急傾斜である。第2号土坑(9図)は、第1号土坑の南東より検出された。60×100mの楕円形で、壁は西側が急で東側がゆるやかである。底部は平坦であるが、4個の落ち込みがある。第3号土坑(第10図)は、ローママウンドの南側より検出された。西側、北側の壁は傾斜をもち、東側は袋状となっており、底部は、平坦である。第1号ピットは、3個の小形の浅い落ち込みよりなっている(第11図)。第2号ピットは、2個の大形の浅い落ち込みよりなっている(第12図)。

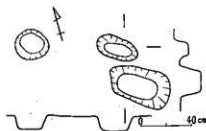


第8図 第1号土坑

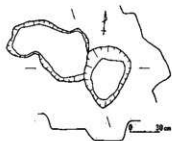


第9図 第2号土坑

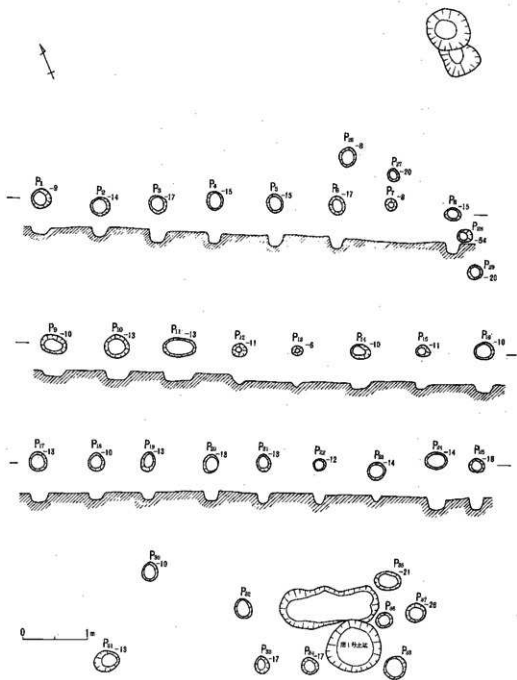
第10図 第3号土坑



第11図 第1号ピット



第12図 第2号ピット



第13圖 柱穴址

柱穴址 (第13図 図版6)

調査地区の東側より検出された。東西に3列、8~9個のピットと、それ以外の規則性のないピットからなる遺構である。ピットは、ローム層上に黒褐色土の落ち込みとなって検出された。北側の列 $P_1 \sim P_4$ は、直径30cm前後、深さ15cm前後、ピットの間隔約90cmと比較的まとまっている。中央の列 $P_5 \sim P_{14}$ は、直径20~50cmと大きさ、形がまちまちであり、深さも一定でない。南側の $P_{17} \sim P_{25}$ は、直径30cm前後、深さ13cm前後と比較的まとまっている。南北にピットをみた場合、中央の列が東側に約20cmほど寄っており、3個のピットの通りがそろわない。しかし北側と南側の列だけをみた場合には、北北東を軸として P_1 と P_{17} 、 P_2 と P_{18} …… P_4 と P_{24} が約4m10cmの間隔でそろった形となる。遺構内からは焼土、焼石等は全く検出されなかった。またローム層上の硬い面も見られなかった。

遺構内からは、時期の決め手となるような遺物は検出されなかった。 (伊藤 修)

第2節 遺物

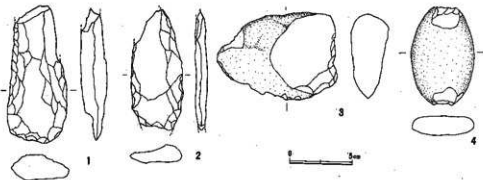
石器 (第14図)

調査の結果、4点の石器が出土した。

打製石斧は2点出土しており、いずれも破損している。№1は、第1号址褐色土より出土したもので材質は緑泥岩である。№2はマウンドの溝より出土したもので、№1に比べて加工が雑である。材質は№1と同じく緑泥岩である。

横刃形石器 (№3) は、第1号址褐色土中より出土した。硬砂岩の自然石の一部を打ち欠き、それに簡単な刃をつけたものである。

石錘 (№4) は、第1号址褐色土中より出土した。材質は硬砂岩である。



第14図 石器実測図 (1:3)

第Ⅳ章 所 見

柏木遺跡は、飯島町七久保柏木部落のはば中央、東西にのびる細長い段丘上に所在している遺跡である。今回の調査は、は場整備事業に伴う埋蔵文化財の緊急発掘として実施された調査である。本遺跡検出の遺構は極めて少なく、しかも完全な遺構は発掘できなかった。しかし、遺物が丘陵全体から出土しているところより、は場整備地区外に遺跡の中心があるのではないとも考えられる。検出された遺構について、思い付いたことを述べてみると。

1. 第1号址は、遺跡の中央を東西に走る農道の下から検出された遺構で、確かに人為的である。西北の角は隅丸方形につくられ、掘り込み状態から住居址のようにも見受けられるが、床面も柱穴も明らかでない点から住居址として取り扱わないことにした。出土遺物は縄文時代の打製石斧、石錘、横刃形石器である。

2. 第2号址。調査地区の南西、水田の畔に接して検出された遺構である。遺構のプランは、耕作で攪乱を受け明らかでない。ピット5箇所が検出されたが、その配列状態より柱穴とは認め難いものである。一部硬く踏み固められている箇所も見受けられるが、床面となるような状態ではなかった。遺物は発見されなかったため、遺構の時期は不明である。

3. ロームマウンド。東西170cm、巾70cm、上部に盛り上げた土の高さは15cm、北側より南側を多く掘り、盛り上げたロームマウンドである。本遺構で注目すべきは、周辺にピットのあることである。ピットの一部は、遺構を壊しており、後に掘られたものであるが、同時に掘られたことも考えられ、マウンドに対する何らかの施設であったのかも知れない。今日、この種の類例が余り知られていないので、今後の資料の増加を待って考えたい。

4. 土坑。本遺跡からは3箇所の土坑が検出されたが、いずれも一般的な土坑である。その他、ピット群が2箇所検出された。いずれも普通のピット群である。

5. 柱穴址。本遺構について2～3気の付いた点を述べてみたい。北側の柱列は、東西の方向に直列に、真々間隔80～100cmに8箇所、中央も同じ方法で8箇所、南側も同じで1箇所多く9箇所、南北の間隔2～2.3m、その範囲は東西8m、南北5m、面積40m²、柱穴の大きさは10～30cm、深さ10～20cm、直穴である。こうした柱穴は、果して掘って建て建物として成り立つかどうか疑問である。建物址でないとする、農作物の乾燥場のような施設かも知れない。いずれにせよ、こうした例は、私の知る限りでは上伊那郡箕輪町猿楽遺跡に検出された2例のみである。ここで結論を出すわけにはいかないで、後日資料の増加を待って考えたい。本址の時期は不明である。

(調査団長 友野良一)



遺跡遺望



図版 1

遺跡全景



第1号址



图版 2

第2号址

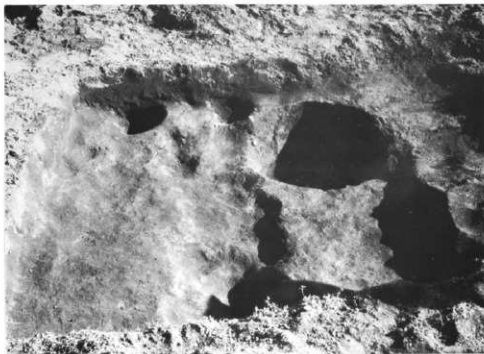


ローママウンド



図版 3

ローママウンド断面



第 1 号土坑



第 3 号土坑



第1号ピット



第2号ピット



柱 穴 址



圖版 6

記 念 攝 影



石斧(第1号址)



石斧(ローママウンド)



石鏢(第1号址)



陶器(その他)



陶器



測量風景



発掘風景



1号トレンチ



サギソウ自生地



オオミズタデ・シロイヌヒゲ



ウメバテソウ



アサマフウソウ



フジバカマ



ワレモコウ



カワラケツメイ



モウセンゴケ



カヤツリグサ



シロイヌノヒゲ



イヌツゲ



ショウジョウバカマ



スズサイコ



キキョウ



モジズリ

あ　と　が　き

七久保地籍異管は場整備事業第1工区に散在する柏木北垣外並びに柏木岡遺跡の発掘が飯島町教育委員会の直営事業として、関係機関の御配慮、御指導と調査団はじめ地元各位の御協力により縄文時代の遺構、土器片、中世・近世陶器片等多くの収獲を納めて調査目的を果し報告書にまとめる事が出来て関係各位に対し深甚なる敬意を表します。

出土した土器片・陶器片からみて、形状に装飾をこらした豊富な種類があったと思われるが、未開の自然の中に生活した先住民の素朴な日常の姿が想像されると共に、美的観賞の面から工芸技術の努力がうかがわれる。

当遺跡より中世陶器片の発見された事は、考古学上の新部門でも、またその流入経路を探索する面でも貴重な資料と考えられる。

尚、発掘に先立って当該地区内の植物の分布調査が町文化財調査委員山口繁氏によって行なわれた結果、150種類に及ぶ植物の存在が判明されたことは、これまた植物学上貴重な資料として併記したい。

昭和50年3月3日

飯島町教育長　　織　田　正　己

— 埋蔵文化財緊急発掘調査報告 —

柏木北垣外・柏木

昭和50年3月25日 印刷

昭和50年3月31日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町
飯島町教育委員会

印刷所 長野県伊那市美簗上大島
みすず創美社

